

ジャパン介護ラボラトリー株式会社

田村武晴

代表取締役



kaigolab.jp

東京都新宿区西新宿3-13-13
西新宿水間ビル6階

ビジョン

介護に関わる全ての人の不安や悩みを減らし、笑顔に繋がる情報を届けます。

はじめまして。田村武晴です。

私はこれまで、在宅医療・介護の現場で対人支援に携わってきました。その中で痛感したのは、支援の質以前に「情報の格差」が大きな壁になっているという現実です。制度を知らない、選択肢を知らない、相談先を知らない——そのことが家族を追い詰めてしまう場面を何度も見てきました。だからこそ私は、現場支援に加え“情報支援”という形で社会に関わることを選びました。田村武晴として今考えていること、そして在宅医療・介護の未来に向けた提案を率直にお伝えします(2026年2月寄稿)。

はじめに

私の仕事は一言で言えば、「介護の情報格差」を埋めることです。制度やサービスは存在していても、言葉が難しい、情報が散らばっている、誰に聞けばいいかわからない——その“わからなさ”が、本人と家族の選択肢を狭め、疲弊や後悔を生みます。だから私は、必要な人に、必要な情報が届く仕組みをつくり、現場の行動に落とし込める形で届け続けています。



「対人支援」から「情報支援」へ——私が新聞をつくる理由

私は医療・介護の現場に20年以上携わり、柔道整復師・鍼灸師としての臨床経験も積み重ねてきました。2001年、川崎市多摩区で“ひとり先生”の接骨院を開業した際、あえて駅から遠い場所、山の上を選びました。すでに高齢化が進み、通いたくても通えない方が出ているからです。最初は万歩計と手作りの歩数表を配り、通院しない日も記録を続けてもらい、紙を見せに来てもらう。そのたびに応援メッセージを書き、日々の小さな継続と一緒に喜び合う——そんな関わりが、いつのまにか半径500メートルの住民が集まる“地域の拠点”になっていきました。

その後、訪問マッサージや介護事業（機能訓練型デイサービス）などを複数展開し、直接雇用は70人規模にまで広がりました。しかし同時に、対人支援には限界があることも痛感しました。忙しさの中で「なんで分かってくれないの」という傲慢さが芽生え、自分の器を超えてしまった。さらにコロナ禍で事業の多くを閉めたとき、心が折れかけました。



それでも、ひとつだけ確信していたことがあります。

「人に貢献することだけはやりたい。これを死ぬ時にやりきれなかったら、きっと後悔する」

そのとき思い出したのが、幼い頃から母に言われ続けた言葉です。

「強くて優しい人になりなさい。優しくなるなら強くなきゃいけないし、強くなるんだったら優しくな
きゃいけないよ」

地域を守るには強さが必要。でも、最後に人を支えるのは優しさ。私はこの軸だけは曲げないと決めま
した。

そしてもう一つ、20年の現場で見えてきた真実があります。

「知っている人と知らない人で、人生の最期が全然違う」

同じような状況でも、適切な情報と段取りを知っている人は、最期の1週間前まで運動を続けられる。知
らない人は早い段階で寝たきりになってしまう。家族から「介護をしなくて済みました」という感謝の
手紙をいただいた経験も、私の背中を押してきました。

だから私は、“対人支援”の経験を土台に、より多くの人へ届けられる“情報支援”へ舵を切りました。転機
になったのが、チャットGPTとの出会いです。コロナ禍で書き溜めていたメモを整理し、文章化し、新
聞記事の形に落とし込める——「これだ」と確信しました。

東京23区・約5,000事業所へ。紙の新聞が届く場所

現在は、東京23区内の介護事業所約5,000社に向けて、「おうちxデイ新聞」を発行しています。推定で、利用者読者数は約
15万人、従業員は約7万5千人、ケアマネジャー約4,000名へ
情報が届く設計です。紙媒体にこだわるのは、介護現場と利用
者にとって「手元に置ける情報」が強いからです。スマホで検
索しなくても、ふとした空き時間に読める。壁に貼れる。職員
同士で回覧できる。家族に持ち帰って共有できる。情報が“行
動”に変わる確率が上がります。



新聞では、国の方向性（政策・制度改正）を現場の言葉に翻訳し、データも踏まえて、誰にでも分かる
形で解説することを大切にしています。同時に、現場の“困った”を掘り下げ、カスハラ対策、離職対
策、社内研修、新商品・新メニュー開発支援など、介護業界・シルバー産業の事業づくりにも伴走して
います。

私が提案している「親の介護は9割外部委託」という考え方

「親の面倒は自分が見なければ」——そう思って頑張りすぎて、心も体も限界を迎える家族は少なくあ
りません。私が提案しているのは、排泄や身体介護など高リスクなケアはプロに任せ、家族は“家族にし
かできないこと”に集中する「9割外部委託」という考え方です。

手を握る。昔の写真を見て話す。好きな匂いを届ける。大切な時間を一緒に過ごす。家族の役割を“介護
の作業”から“関係の回復”へ戻すことで、本人にも家族にも、穏やかな時間が生まれます。

続きはQRコードからアクセスしてください → → →

